印度學佛教學研究第37卷第1號　昭和63年12月

Yogadṛṣṭisamuccaya のヨーガ階梯

——sthirā kāntā——

浅　野　玄　誠

本稿は，既発表の Haribhadra-sūri 著 "Yogadṛṣṭisamuccaya" に関する研究の続編に相当する[1]。YDS において Har. はジャイナ論師の立場から八つのヨーガ視点 (yogadṛṣṭi) を順次解説するが，学術大会では未発表の後4視点を概観した。本稿では紙面の都合上，後4視点 sthirā, kāntā, prabhā, parā のうち，第5視点 sthirā および第6視点 kāntā に限ってその内容を論考してみたい。

また，Har. の8ヨーガ視点を考える場合，しばしば Patañjali の八支ヨーガをその対象概念として参照するが，これは Har. 自身の論の展開に依るものである。Har. は8ヨーガ視点の解説のうち，7ヨーガ視点に至るまでのそれぞれにおいて，つねに Patañjali の八支ヨーガを引用している。ただし，実際上 Har. のヨーガ観は，Patañjali の八支ヨーガにとらわれるところ少なく，さらに Vyāsa の見解をその考察過程に援用することにいたっては，Har. および Vyāsa の生存年代の確定に不確実な要素が残ることも勘案して，危険であるといわざるを得ない。

ただし，Patañjali の見解の Har. 自身の手になる引用は，Har. のヨーガ観を顕在化させる上での重要な資料であることも否めない。ここでは両者を比較対照することを目的とすることなく，Har. のヨーガ観を明らかにするための資料としてそれを利用していきたい。また，Vyāsa の見解をもって Patañjali の論を補う場合は，Vyāsa があくまで Patañjali の意図を正確に継承していると考えられる場合に限定されることはいうまでもない。

1.　第5視点sthira

この位において修行者は，一切の享受を捨て，内面的なる唯一の光 (abhāyaṃ kevalaṃ jyotiḥ) と称せられる智慧を，聖典の分別 (śruta-viveka, āgama) の学習 (abhiniveśa) による法の精髄たる精神の生起から獲得してゆくとされる[2]。ここで注目されるべきは158と160である。

このようにして不動なる分別をもてるものは，〔感官の〕抑制を勝義とするものであり，同様に教法を障げるものをとり除く意欲をもてるものである。　(YDS 158)

〔神や世間における如き〕法より生ずる享受であったとしても，有情にとっては意味のないものである。それはあたかも白檀から生ずる火が確かに燃える如くである。

(YDS 160)

158の前半部分，「不動なる分別をもてるものは，〔感官の〕抑制を勝義とするものであり」は，YS II-54 で YS の述べる第5ヨーガ支分 pratyāhāra を解説して「諸感官が自己の対象と結びつかず，あたかも心自体に似たるものであるかの如くなるのが制感 (pratyāhāra) である」とするのにまさしく相応し，一，方後半の「教法を障げるものを取り除く意欲をもてるものである」という sthirā の定義は，Har. 独自の見解であるといえよう。前者はおそらく，一般的な第5支分の定義を形式上援用したに過ぎず，後者こそが Har. が sthirā に託す重要な意味を含んでいる。後半の見解は多分にジャイナの伝統を意識して述べられており，この姿勢はそれに続くいくつかのカーリカーで，より明らかにされる。特に160とその自註は，彼の第5視点 sthirā の性格を明らかにするための重要な役割を果たしている。

160の冒頭「法より生ずる享受であったとしても」は，自註によって，神や世間における法より生ずる〔と考えられる〕享受は放逸 (pramāda-vidhā) の故に人間には意味の無いものである，という意味であり，この放逸魂 (pramāda-jīva) とは結びつかない救済者 (tīrtha-kara) 等の果を清浄化させたものによって，福音の成就等に関する聖典の学習 (abhiniveśa) から，法の精髄たる精神の生起がある，とされる。

ここにもちいられる放逸 pramāda とは，TAAS VIII-1 に「束縛の原因は邪見 (mithyādarśana) と無禁誓 (avirati) と放逸 (pramāda) と汚穢(kaśāya)と行為(yoga)である[5]」と述べられる束縛の原因の一つであり，ジャイナの禁戒を妨げるものとしてきわめてオーソドックスな概念である。

同様に，聖典の学習 (abhiniveśa) は，聖典智 (śruta) につながるものであり，これもまたジャイナの伝統に沿って述べられているとみることができる[6]。かかる概念は既に，第1視点 mitrā にもちいられる「聴聞」(śravaṇa) に始まり，第4視点 dīprā では「聖典智」(śruta) を介して真実の教法を獲得する，と述べられている如く[7]，これらは，Har. のジャイナ伝統説に随順する一貫した思想の継承と受け取ることができる。Har. の思想の根底には，「「正見」(samyag-darśana)「正智」(samyag-jñāna)「正行」(samyak-cāritra) とが解説への道である[8]」とするジャイナの基本的な姿勢が常に意識されているのである。

2. 第6視点 Kāntā

kāntā以降の視点においてHar.の見解は，ますますYSのそれとは隔たったものとなる。YSでは相当ヨーガ支分「総持」dhāraṇāを，「心を（一）所に結びつけることが総持である[9]」と解説するが，YDSでは「この（kāntā）の位において，〔人は〕法の権威によって行為を清浄化することを原因として，一切有情に愛されるべきものとなり，また法に専注するものとなる」(YDS 163)[10]，「伝承される法（=聖典智 āgama）に意（manas）は常に〔相応し〕，一方肉体（kāya）は，これ（kāntā）とは別の次元（=一般性，世俗性）に〔相応する〕。しかしながら，〔この位を修得するものにとっては〕ここに示される智慧によって，〔感官を対象に結びつける〕享受が世俗的存在（=輪廻）の原因とはならない」(YDS 164)[11]と考えるのである。

YSでは第6支 dhāraṇā から後の3支分は総合的に総制（saṃyama）に集約され，これを介して独存（kevala）が実現されてゆく。その過程に，YSは総持 dhāraṇāの具体的な到達目的を大離心（mahāvidehā）と定め，「外的な想像されざる働きが大離心（mahāvidehā）である。それにより，照見（prakāśa）を覆うもの（āvaraṇa）が滅する[21]」と説く。つまり，身体の外に実際に出て働く意の作用を実現し，その動きをもって「総持によって，照見を本質とするブッディの純質に関して，動質・暗質を根本とする，それを覆うものの滅がある[13]」とするのである。

これはヨーガの修習による解説にむかう意の到達階梯としてたいへんよく整理されたものといえようが，一方Har.の場合は，このような具体的な意（manas）の状況を説くことはない。それはHar.のヨーガ観の独自性をよく表わしている。すなわち，YSが解説に至る具体的な心作用の変化を個の中に表現しているのに対し，Har.は世俗的存在から解説までの道のりにおける現在の状況を，社会的に位置づけているといえよう。かような理解により，前出のYDS 163,164と，これによって説示される第6視点 kāntā の役割はさらに明瞭となろう。つまり，この視点の位置づけは，この階梯にいたるまでの法（ジャイナの教え）への学習と帰依とによって，意（manas）が聖典智（āgama）に相応するようになるが，一方肉体は依然として残り，享受を続けている，しかしながら，もはやその享受が輪廻の原因とはならない質のものに変化している状況，と理解されるのである。

そのことは，続く165，166に用いられる特徴的な喩説によってさらに顕在化されている。

「幻の水の真実を知るものは，驚くことなくそれを遠ざける。〔かように精神的な〕障害を取り除くものは，彼の〔幻の水〕の真っ直中を進んでゆく」 (YDS 165)

「享受の自性を知るものたちは，幻の水を〔見分けるものたち〕に類似している。なんとなれば，例え享受を伴っていたとしても，執着を離れたるものは，解脱に赴くからである」 (YDS 166)

本稿では紙面の都合により，Har. の後4ヨーガ視点すべてにわたって論ずることができなかったが，それを含めてここに簡単なまとめと問題の提起をしておきたい。

Har. のヨーガ観は，YS などに述べられる非常に発展した形態のヨーガ観に比して，もっと古い形でのヨーガを継承しているのではないかと考えられる。第4視点までと比較しても，YS の見解を参照しつつも，YS に述べられるヨーガ八支への傾倒は，後4yogadṛṣṭi にあっては一層希薄となる。

その原因として考えられるのは，YS が dhāraṇā 以降の3支を saṃyama に集約し，法雲三昧を通して無種子三昧にいたる過程を非常に具体的に，しかも明確に説こうとするのに対して，YDS はこの部分でジャイナの伝統説，特に guṇasthāna への依存を強め，自身はその状況を観念的に表現するに留まり，具体的な議論を欠如していることである。すなわち Har. のヨーガでは，ヨーガそのものが目的となるのではなく，ヨーガの修習によって感官の制御をおこない，汚辱を滅っして真理に近づいていく状況を作り出すことが求められているのである。

こうしたヨーガの位置づけは，あるいはヨーガ学派以外の学派にあってヨーガが論じられる時，ごく自然なことであるかもしれない。しかし，ジャイナの場合，それは彼らの持つ苦行主義的な方向性との関係の上で詳察されねばならぬ問題であり，いずれ稿を改めてそのあたりを考えてみたい。

【凡例】 Har. : Haribhadra-sūri　　YDS : Yogadṛṣṭisamuccaya
YS : Yoga-sūtra

---

1) 拙稿「Haribhadra-sūri のヨーガ考察—Har. の八支ヨーガ研究ノート—」印度学仏教学研究35-1，「Haribhadra-sūri の解脱への道—YDS にみるヨーガの階梯—」仏教学セミナー45

2) cf. Autocommentary ad YDS 160

3) evaṃ vivekino dhīrāḥ pratyāhāraparās tathā /
dharma-bādhâparityāga-yatnavantaś ca tattvataḥ //

4) dharmād api bhavan bhogaḥ prāyo' narthāya dehinām /
candanād api saṃbhūto dahaty eva hutāśanaḥ /

5) mityādarśana-avirati-pramāda-kaṣāya-yogā bandha-hetavaḥ.
6) cf. TAAS I-9.
7) 前掲拙稿「……解脱への道」参照
8) cf. TAAS I-1.
9) YS III-1.
10) asyāṃ tu dharma-māhātmyāt samācāra-viśuddhitaḥ /
priyo bhavati bhūtānāṃ dharmâikâgramanās tathā //
11) śrutadharme mano nityaṃ kāyas tv asyânya-ceṣṭite /
atas vākṣepaka-jñānan na bhoga bhava-hetavaḥ //
12) cf. YS III-42.
13) cf. Vyāsa's commentary ad YS III-42.
14) māyâmdhas-tattvataḥ paśyann andvignas tato drutam /
tanmadhyena prayāty eva yathā vyāghāta-varjitaḥ //
15) bhogān svarūpataḥ paśyaṃs tathā māyôdakôpamān /
bhuñjāno'pi hy asangaḥ san prayāty eva paraṃ padam //

<キーワード> Jaina, Yoga, Yogadṛṣṭisamuccaya, Haribhadra-sūri

（大谷大学講師）

新刊紹介

平岡定海著

『日本寺院史の研究　中世近世編』

A 5 版・837 頁・定価 12,000 円
吉川弘文館・昭和 63 年 11 月 20 日